

★2026 年朗読劇公演の登場人物予定(BEREAVEDver.)

鈴木良子(女性)…25 歳、主人公、夫の一彦がヘリコプター事故で行方不明に

棚橋優子(女性)…30 歳、良子の姉、長女

棚橋杏子(女性)※男性の可能性あり…28 歳、良子の姉、次女

藤田佳美(女性)…50 歳、良子と一彦が住むアパートの大家、娘を亡くしている

乙花(女性)…(年齢不詳・40 歳ぐらい)幽霊の言葉が聞こえる霊媒師

大下智仁(男性)…28 歳、良子と同じアパートの住人、妻の沙弥加を亡くしている、なぜか幽霊の言葉が聞こえる

大下沙弥加(女性)…25 歳、死んでしまって幽霊として存在している、智仁の妻、生前は友達作りが苦手だった

鈴木一彦(男性)…25 歳、良子の夫、まだ行方不明の段階だが、幽霊として存在し始める

★2026 年朗読劇公演の登場人物予定(GHOSTver.)

島貫拓郎(男性)※女性の可能性あり…36 歳で死去、幽霊として存在している

藤田あいこ(女性)…22 歳で死去、佳美の娘、静かにできない幽霊

大下沙弥加(女性)…25 歳、死んでしまって幽霊として存在している、智仁の妻、生前は友達作りが苦手だった

鈴木一彦(男性)…25 歳、良子の夫、まだ行方不明の段階だが、幽霊として存在し始める

藤田佳美(女性)…50 歳、良子と一彦が住むアパートの大家、娘を亡くしている

大下智仁(男性)…28 歳、良子と同じアパートの住人、妻の沙弥加を亡くしている、なぜか幽霊の言葉が聞こえる

乙花(女性)…(年齢不詳・40 歳ぐらい)幽霊の言葉が聞こえる霊媒師

鈴木良子(女性)…25 歳、主人公、夫の一彦がヘリコプター事故で行方不明に

第一場

三月上旬。場所は東京の郊外。

良子と一彦の住むアパート。

アパートは二階建て八部屋ある木造アパートである。

時間は、夕方十八時ぐらい。

明かりが入ると、良子、良子の姉の優子が入ってくる。

良子、座る。優子は窓を開け、外を見て、窓を閉める。

優子

ああ、うっとうしい。人がひとり行方不明になってるって言うのに。旦那様は見つかったんですかって、見つかってないの知ってんだろ！知ってて聞くなよ！って言うてやりや良かったね！

良子

…。

良子のそばに座り。

優子

カズくんはきつと見つかる。姉ちゃん、そう思うな。だって、カズくん頑張り屋さんだもん。どんな逆境に置かれても、それに打ち勝つ子だよ。だから、今頃きつと、誰も知らない無人島とかに上陸して、捜索隊の人たち、待ってるんだよ。そりゃ、お腹もすいて、体力もギリギリかもしれないけど、もう一度良子に会うために、今頑張ってるの。だからさ、良子も頑張らないと。

良子

…。

良子、立ち上がり、ベッドに移動し座る。

優子

九州はさ、今日までずっと雨だったけど、明日は晴れるみたい。明日はヘリコプター、海の上、びゅんびゅん飛んでいけるだろうから、きつと見つかるよ。

姉ちゃんさ。

良子

ん？

優子

いいよ。そんなの。

良子

え？

優子

いいよ。そんな、私を元気付けようって、みえみえの嘘をつかなくなつたって。

良子

嘘？

優子

何で警察や、海上自衛隊が、今日で捜索を打ち切ったのか？その意味ぐらいわかるよ。

良子

良子。

優子

カズの乗ったヘリコプターは、東シナ海に墜落したの。生存の可能性は低いってこと。だから今日で打ち切ったの。

良子

そんなことない。

優子

じゃあ、何で私たち、奄美大島のホテルから、自宅に帰されたの？絶望的ってことでしょ。

良子、立ち上がる。

良子

今日で捜索を打ち切ったのは、そういう決まりなの！仕

方なかったの！でも明日からは民間のレスキュー会社が
搜索してくれるから！きっと見つかるから！
良子
…。

インターフォン。優子、出る。

杏子の声 私！開けて！
優子
…。

優子、玄関に向かう。一旦退場。

良子のもう一人の姉、次女の杏子が登場。
優子も戻ってくる。

フッフッフ。

…。

すごいマスコミの数。

…。

写真、バンバン撮られたわ。週刊誌か何かだと思うんだ
けど、私、芸能人でもユーチューバーでもインフルエン
サーでもないつつうのにねえ？

杏子。

ああ。そうね。

杏子、優子に近づき。

杏子
(小声で優子に) 話した？

優子
(小声で) 話してないよ。
杏子
なんで話してないの？
優子
(小声で) 杏子から話すんでしょ？さっき決めたでしょ。
…早く、話してよ。

優子、杏子を押す。

良子
何？

杏子
…(咳払い) 良子。

良子
何よ。

杏子
行方不明になるって、大変なことだね。

良子
そうだね。

杏子
警察や海上自衛隊の人たちは、大変な思いをして、カズ
くんを搜索してくれた。

良子
そうだね。

杏子
皆いい人だったね！私、協力してくれたすべての人たち
に、感謝の思いしかないんだけど！

優子
(小声で) 杏子！

杏子
やっぱり無理。

優子
(小声で) しっかりして！

杏子
(咳払い) …。

杏子、オロオロしながら

杏子
ヘリコプター。
良子
ヘリコプターが何？

杏子 たくさん飛んでたね。

良子 そうだね。

杏子 そりゃそうだよね。海の上で行方不明になったんだもん。見つけるためには、ヘリコプターが必要。

良子 そうだね。

杏子 ヘリコプター…お金がかかるよね。明日から。

良子 …。

杏子 お金を出さないと、カズくんの搜索、続けられない。

良子 だから？

杏子 だからあの、その…テレビに出てみたらどうかなって、思ってるの。

良子 テレビ？

杏子 そう。テレビ。

良子 何で？

杏子 今の良子をドキュメントにしたいっていうディレクターさんがいて、それをやると、搜索活動の支援をしてくれるみたいなの。支援ってわかるよね？お金。お金、負担してくれんの。

良子 …。

杏子 難しいことはない。特別な技術もいらない。今の思いを素直に話すだけで、搜索費用をちよつと負担してくれる。カズくんの会社の人たちが勧めてくれたの。明日からの搜索活動は、民間のレスキューに切り替わる。そしたら、

良子 お金がすつごいかかることになる。現地のレスキュー隊員への謝礼と食料費。臨時ヘリポート設置費。一日搜索するたびにどんどんお金がかさんでいく。でも、そのド

良子 キュメントに出演したら、費用をちよつとだけ負担してくれるの。

杏子 クラウドファンディングしたりとかで、支援してくれる人も見つかるかもしれない。

良子 …。

杏子 別に嫌ならやらなくてもいいし、無理にっていうわけじゃないけど、でも、今の状況を考えると、これがベストなんじゃないかなって、思う…。

良子 …（にらむ）。

杏子 …んだけど、どう？

良子 …なんでそんな事いうの？今の思いを素直になんて、言えるわけないでしょ。今素直になると、色々なものが崩れていく気がする。

杏子・優子 …。

良子 想像してみなよ。ま、二人とも結婚してないけど、例えば、自分の彼氏が死んだら、どうなる？どうする？テレビカメラの前で、気持ちを話す？出来るわけないよ。ってそれぐらいの想像つくでしょ？

杏子 そうだね。そうだと思うんだけど。

良子 見損なつたよ。二人とも、頼りないところあるけど、もつと本当のところ、わかってくれてると思つてた。それなのに（言葉が出なくなる）

杏子 ごめん。

優子 わかつてるよ。

良子 …？

優子 良子の気持ち、十分わかつてるよ。でもね。もしこれ以

上お金出すの無理ってなったからね、良子の方から、もういいですって言わなきゃいけないの。それは、良子が、カズくん、切るってことなんだよ！それはさ！くやしいじゃん！

…。

支援してもらえたらさ！一日でも長く捜索が出来るじゃん！そっちの方が絶対いいじゃん！

優子
良子

優子、崩れ落ちる。

わかったよ。やるよ。

…。

その代わり。なるべく早く終わらせてもらうように言ってもらえるかな。あんまり、今の自分と向き合いたくないんだ。

わかった。言っとく。

…。

優子
良子

良子、ベッドに座る。

杏子！

何々？

杏子がちゃんと言ってくれないから、私、気持ち高ぶって、こんなことになったじゃない！

こんなこと？

杏子がちゃんと言ってくれたら、こんなことにはならな

優子
杏子
優子

かった！

杏子
いや、私、まあまあちゃんと言ったと思うけど。

優子
杏子のせいだよ！

杏子
？

優子、立ち止まり、急に物思いにふける。

私、どうすれば正解だったの。

…。

正解が分かりません。

（首をかしげて）…で、その人たち、いつ来んの？

お姉ちゃん！

ああ！

いつ来るの？そのテレビの人たち。

早い方がいいもんね。明日から民間のレスキュー、始まるんだから。

杏子
良子
杏子
優子
杏子
優子

優子。スマートフォンを出して、ラインを送る。

呼んだ。近くで、取材してるらしいから、すぐ来ると思う。

すぐ。

うん。

良子、無理しなくていいからね。出来る範囲でいいから。…。

優子
杏子
良子

良子、離れる。

杏子

…（一つ息をついて）そりやそうだね。カズくんは、遭難した船をレスキューしようとして行方不明になった。いわば、悲劇のヒーロー。マスコミの格好のおもちだよ。

杏子、カーテンを少しだけ開けて、外を見る。

パシャ！

杏子

わ！

杏子、カーテンを閉める。

杏子

何？

優子

本当、うつつしい。

優子、窓を開けて。

優子

…（外に向かつて）こっちは家族が行方不明になってんだよ。人の気持ち考えろよ！

強風。

優子

わあ！

優子、窓を閉める。

優子

すごい風。

杏子

春の嵐。もう三月だし。

インターフォンの音。

三人、見る。

優子

来た。

杏子

テレビの人？

優子

多分。

優子、玄関へ。

杏子

本当に、近くにいたんだね。

良子

…。

杏子

本当に、無理しなくていいからね。

良子

…。

優子、戻ってくる。

テレビの制作会社のディレクター・児玉、アシスタントディレクターの三上、登場。

優子

どうぞ。

児玉

お世話になります。

優子

こちらこそ。よろしくお願いします。

三上　こんばんは。
杏子　はじめまして。

児玉　真ん中のお姉さん。

杏子　棚橋杏子です。

児玉　関東テレビ制作会社の児玉です。

杏子　よろしく願います。

児玉　よろしく願います。…アシスタントディレクターの
三上です。

三上　三上です。

杏子　三上です。よろしく願います。

杏子　よろしく願います。

児玉、良子を見て。

児玉　鈴木、良子さん。

良子　…。

児玉、近くに寄り。

児玉　児玉と申します。

良子　鈴木です。

児玉　この度は、お気の毒様です。心中、お察し申し上げます。

良子　どうも。

児玉　ええ。…こちらのお姉さんからお話は聞かれてとは思
いますが、私どもといたしましてはですね、情報面、資
金面など、出来る範囲で良子さんとご家族のバックアッ
プをさせていただいておりますので、どうか気を

強くもたれて、希望を持って、旦那様のご生還をお待ち
になってください。

良子　ありがとうございます。

児玉　では、早速ですが、準備に取り掛かせていただきます。

三上　三上さん。

三上　はい。

三上、バッグから、デジタルビデオを取り出す。

良子・優子顔を見合わせて。

優子　もう、やるんですか？

児玉　まずはテストみたいな感じです。今日は時間も時間です

し、明日からどういう感じで撮影させていただくか、イ
メージをつかんでいただきたいと思います。

優子　そうですね。どうしよう。

杏子　じゃ、リハーサルみたいな感じで、ちょっとやってみ

ら。

良子　うん…。

児玉　撮影には、デジタルビデオを使用します。通常のテレビ

カメラの方がもちろんいいんですが、たくさんの方のマス
コミの人間がおりますので、持ち込むにはこちらの方がい

いかと思います。

優子　了解しました。

三上、セッティングが終わる。

児玉
では。

良子、神妙な面持ちで座る。

児玉
（握りこぶし）こちらを見てください。

良子
はい。

児玉
始めます。

良子
…。

児玉
この度は、お気の毒でございます。

良子
…（会釈）。

児玉
旦那様とはいつご結婚されたんですか？

良子
半年前です。

児玉
半年前？今3月ですから…。

良子
去年の10月です。

児玉
なるほど。…じゃあ、ご結婚されてから、一緒にこのアパートに住まっていたと言う事ですか？

良子
そうですね。

児玉
なるほど。…ご結婚される前は、こういったところでお知り合いになられたのですか？

良子
高校の同級生でした。

児玉
同級生？

良子
はい。

児玉
そのときからお付き合いをされていたと。

良子
そうですね。

児玉
では、旦那さんが遭難された今、率直に、どういうお気持ちですか？

良子
…。

児玉
…。

良子
…。

児玉
話せる範囲で、話してくだされば結構です。

優子
あの、あんまりストレートに聞くのは…。

児玉
わかってます。答えられる範囲で結構です。

良子
…無念です。

児玉
なるほど。旦那様は民間のヘリコプターレスキューの仕事をしていました。

良子
…。

児玉
それで、奄美大島沖で船が消息を絶ったのを聞いて、正義心から、たった一人でレスキューに出られた。ところが、旦那さんも行方不明になってしまった。その点については、どういったお気持ちですか？

良子
…。

児玉
答えられる範囲で結構です。

良子
だから、行かないでって言ったのに！

良子
…。

良子
奄美大島は雨が降ってた。危険なレスキューになるってわかってた！会社の人も止めた！それなのに…一人で向かうなんて！…なんで、あの時、考え直してくれなかったの？

良子
…。

良子
…。

良子
…。

良子
…。

良子
…。

良子
…。

良子
…。

良子
…。

良子
…。

良子
…。

良子
…。

良子
…。

良子
…。

良子
…。

良子
…。

良子
…。

良子
…。

児玉 どうぞ。
優子 …。

優子、インターフォンに出る。

優子 はい。
守の声 相良です。
優子 相良さん。
守の声 はい。お隣の、205の。
優子 …。

優子、受話器を置いて退場。

良子 …。

良子、立ち上がって。

杏子 良子！

奥の部屋へ退場。

全員 …。

優子、戻ってくる。

隣の二〇五号室に住む、相良守と芙美子夫妻が登場。

守 どうも。
芙美子 どうも。

守 二〇五の相良です。

全員 …。

守 芙美子。

芙美子 …（うなづく）。

守 鈴木さん。この度は…。

守・芙美子 お気の毒様でございます！

守 僕たちに何かできることがありましたら、何でもやりま
すので…。

守・芙美子 何でもおっしゃってください！

杏子 すみません。

2人 …？

杏子 あの、良子、今、ちょっと。

守 ……（確認して）ああ……芙美子。お隣さん、いないよ。

芙美子 え？

守 いると思ったけど、よく見たら、いなかった。

芙美子 本当。てことは、私たち、今、すごい恥ずかしいこ
とになってしまったかもしれない。

守 うん。すごい哀れな人たちになっていた気がする。

芙美子 うん。

杏子 あの？

守 はい！

杏子 何か？

守 フフフフフ。

芙美子 フフフフフ。

杏子 お姉ちゃん、お隣さん、どうされたの？
優子 このドキュメンタリーがいいものになったら、たくさん

スポンサーがつくかもしれない。支援も多く集まるかも
だから、協力してもらえる人には全員協力してもらおう
って思ったの。

杏子 いつ話したの。

優子 お電話で。大家さんに電話番号教えてもらって。

杏子 そうなの？

守 今回のことは僕たちもニュースで見ても、心を痛めてまし
た。だから、お電話いただいたとき、何かできることが
あればって、思ったんです。

芙美子 …（うなづく）。

杏子 そうでしたか。

三上 でも。

全員 ？

三上 お隣さんのお気持ちはありがたいんですけど、良子さん、
あまり乗り気じゃないみたいです。

全員 …。

三上 もう一度、判断が必要かもしれません。

全員 …。

守 え？

児玉 私たちはもちろん撮影させていただきたいのですが、や
はりすべては良子さん次第ですから、良子さんの気持ち
を考えるんだったら、今日の撮影は終わりにして、お隣
さんには帰っていただきましょう。
守 僕たち、帰るんですか？

児玉 いや、ちょっと待ってください。

芙美子 あの、私たち。

守 僕たち、帰る？

児玉 例えばの話です。

守 ああ。

優子 妹に、カズくんを切る、なんてことは絶対にさせません。

全員 …。

優子 私が何とかします。

児玉 わかりました。じゃあ、進めていきましょう。

守 じゃ、僕たちは。

児玉 お話、聞かせていただきましょう。

守 わかりました！

芙美子 あなた！

守 そりゃそうですよね！僕たち、来て早々に、帰ってる場
合じゃないですよね。それに（優子に）ほら。あれのこ
とも。

優子 え？

守 例の件ですよ。

優子 ああ。

児玉 何か？

優子 （小声で）このアパート、妙な噂があるんですって。

児玉 噂。

優子 その件もお隣さん、詳しいから、もしかしたら何かのネ
タになるかもしれないじゃないですか。

児玉 …そうですか。それじゃ、お聞きしましょう。えっと、
お名前伺ってもよろしいですか。

守 二〇五号室に住む、相良守です。
妻の芙美子です。

芙美子 関東テレビ制作会社の児玉です。

児玉 三上です。

三上 よろしくお願いします。

守 よろしくお願いします。

芙美子 よろしくお願いします。

優子 (相良夫妻に) 妹の杏子です。

杏子 杏子です。

守 よろしくお願いします。

芙美子 よろしくお願いします。

守 それじゃあ。…僕たちはいつでも大丈夫ですよ。

児玉 例の件、伺います。

守 例の件。わかりました。

守、座る。全員、座る。

守 出るんです。

児玉 出る。

守 (幽霊のボディアクションをして) うらめしや。

全員 …。

芙美子 私、靈感があるからわかるんです。夕飯の支度をしてい

ると、背後を、フーって通り過ぎるのを感じるんです。

全員 …。

守 これは、下の階に住む山岡さんの奥さんから妻が聞いた

話なんですけど。山岡さんも新婚夫婦なんです。それで、旦那さんが会社から帰ってきて、インターフォンが鳴ったんです。それで、いつも通り、旦那さんを玄関まで迎えに行つて、ドアを開けようとする、妙な胸騒ぎがしたらしいんです。

全員 …。

守 それで。何か嫌な予感がするけど、思い切ってドアを開

けたんですって。そしたら…ただいまと言って中に入

ってくる旦那さんの後ろに、恨めしい顔をした、女性の

霊が！

芙美子 きゃ—————！

全員 …。

芙美子 すみません。

全員 …。

児玉 その後は？

守 その後は、気がついたら、女性の霊は消えていて、何も

なかったそうですけど。

児玉 うーん。

芙美子 あと、アパートの脇に駐車場があるんですけど。そこに

よく出るらしいんです。

守 駐車場の噂多いよな。

芙美子 多い多い。車に乗り込むと、後部座席にいたとか。ドラ

イブに出かけようとしたら、バンパーに張り付いていた

とか。

守 大体夜なんだよな。

芙美子 そう。

全員
守 …。

だから、これはこの周辺の住人がみんな言ってるんですけど。このアパート、新婚夫婦が多いんで、きつとこのアパートで昔、殺人や自殺か何かがあつて、幸せな新婚夫婦を恨めしく思う霊がたくさん取り付いているんじゃないかって。

芙美子
新婚生活を邪魔をする霊なんです。

新婚生活を邪魔する霊。

全員 …。

だから、ま、こんなこと言うのはあんまりよくないんですけど…今回、鈴木さんの旦那さんがこんなことになったのは、その悪い霊のせいなんじゃないかって思うんです。

全員 …。

…。
ないですよ！いや、ない！

三上 …。

私、そういう心霊現象を信じてない性質（タチ）なんですよ。わけてもらいますけど、そんなの、単なる噂ですから！

全員 …。

人が死んだらゼロになるんです。何にもなくなるんです。死後の世界なんて、人間が作り出した妄想ですよ。

守 …。

でも、見たって言う人が、こんなにたくさんいるんじゃないですか！

三上 …。

だからそれは噂ですって！

いえ、妻だって、見たって言ってるじゃないですか！だから、もしかしたら今もこの辺にいるかもしれない。そ

う。例えば！あの窓から！そつと顔を出す、新婚夫婦の邪魔をする霊が！

すると、窓から沙弥加の姿が見える。

芙美子 うわあああああああ！

全員、窓の方向を見る。沙弥加はもういない。

芙美子 今、あそこに…。（児玉の後ろを指差す）

児玉 あそこ？（と振り返る）

芙美子 人の姿が…。

児玉 ？

芙美子 うわあああああああ！

芙美子、退場。

守 芙美子！

守、退場。

児玉、三上、一旦退場。

第二場

照明変化。行方不明三日目。21時頃。

相良夫婦、児玉・三上が戻ってくる。

そして、このアパートの大家の藤田佳美、娘の藤田のぞ美が登場。

児玉が窓際に寄り、佳美に何か説明している様子。

佳美 そんなこと、ある訳ないじゃないですか。ここ、二階ですよ。

芙美子 大家さん、でも本当なんです。今確かに、人影があったんです。

佳美 のぞ美ちゃん、どう思う？

のぞ美 知らねーよ。（スマホを触っている）

児玉 こちらは。

佳美 娘です。のぞ美ちゃん、ご挨拶しなさい。

のぞ美 うっせえなあ。

児玉 …。

佳美 わかるわ。ご挨拶しなさい、そんなこと言われたら、とても、うっせえ。でもね、こういう時はご挨拶するのよ。

ほら。

のぞ美 （会釈）…。

全員 （なんとなく会釈）…。

佳美 偉いわ。のぞ美ちゃん、偉い。

杏子 優子。この大家さん、なかなかだね。

優子 うん。

杏子 こういう場面に遭遇すると、子供ができたときのこと、

今から真剣に考えとかないとして、いつも思われる。

優子 うん。私、今、既に考えてる。

佳美 （一回咳払いして）で、さっきおっしゃってたの、何でしたっけ？

児玉 あ、住んでる方の噂なんですけど。その、このアパートには、出ると。

佳美 …。

児玉 このアパートには新婚夫婦の方がたくさん住んでいると聞きます。その夫婦の、まあ、幸せな一コマに、よく現れるということらしいんですけど。

佳美 よく調べましたわね。そんなこと。

児玉 いえ、まあ、色々取材した結果、様々な方がおっしゃっていたということなんですけど。

守・芙美子 …。

佳美 それをテレビに？

児玉 ああ、いえ、それはまあ、あくまでひとつのエピソードとして、構成の一つの候補として抑えておこうかな、ぐらいの感じなんですけど。

佳美 よく、そんな下世話なこと思いつきますわね。テレビの人間ってもう少し高尚なことを思いつくのかと思ってました。

児玉 …。

佳美 娘。大学受験を控えてるんです。私立のお嬢様校を考えてます。

杏子 お嬢様校。

佳美 何か？

杏子 あ、いえ。（口チャック）

優子 …。（口チャック）

佳美

すでに一浪してますし、入学金も学費も結構な額がかかりますから、そんな物騒なこと、テレビで流されて、アパートが空っぽになっちゃったら、たまったもんじゃありませんわ。

児玉

…。

佳美

この度の鈴木さんは、お気の毒だと思います。でも、それをアパートのせいにするのは、筋が違うってものじゃありませんか？

児玉

いえ、そういうつもりじゃないんですけど。

佳美

のぞ美ちゃん。帰るよ。

のぞ美

…。

児玉

あ、ちょっと待ってください！

佳美

…。

児玉

あの、もう一つ伺いしておきたいことがあります。

佳美

…。

児玉

一〇一号室に住む大下さん。ご存じですよ？

佳美

もちろんです。

児玉

大下さんの奥さん、つい先日、亡くなったっていうのは、

事実ですか？

守

そうなんですか？

杏子

そうなんですか？

佳美

それを知ってどうするつもりですか？

児玉

参考までに。

佳美

事実ですけど。

守

ええ？

芙美子

…。

児玉

とすると、もしかしたら、相良さんが見たというのは、その…大下さんの奥さんの霊だったりするんじゃないでしょうか？

佳美

…。

児玉

いや、私もあまり信じたくないですけど、でも、そうだとすると、噂、相良さんがおっしゃってること、全てがつながる。

佳美

もう、やめてくれないかしら！！

全員、驚く。

佳美

母さんは悪くないわよ。母さんのせいじゃないんだから。

全員

…。

佳美

無念だったと思うわ。明るい未来を不慮の事故で奪われたんだから。気持ちわかるわ。でも、母さんに言われても、どうしようもないのよ。そんな、母さんにとりつかないで。

全員

…。

佳美の様子がおかしくなってくる。

佳美

何よ。どうするつもり？そんな恨めしい顔で見たからって、どうにもなりやしないよ。ああ！やめて！母さんが悪いんじゃないの！恨むなら…運命を恨みなさい！

全員

…。

佳美、突然走り出し。

佳美 あ————！！！！

追い詰められたように止まって。

佳美 やめて。やめて。

座り込んで。

佳美 ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。

全員 …。

佳美 あなたの人生を奪ってごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。

全員 …。

のぞ美 姉ちゃん、死んでから、ずっとこんな感じですよ。

全員 …。

のぞ美 毎晩、見えない何かに向かって、ずっと謝ってるの。そのせいで、不眠症でヒステリックになっちゃって。おかげで私、よく殴られんだ。

児玉 え？

杏子 そうなんだ。

のぞ美 ポッコボコだよ。

杏子 そんな風には、見えないけど。

のぞ美 でも、親の面倒見んのが、子供の役目だと思ってるからさ。
杏子 …。

のぞ美、怯えている佳美に寄って。

のぞ美 母さん。

佳美 …。

のぞ美 わかる？

佳美 のぞ美ちゃん。

のぞ美 大丈夫だよ。

佳美 …。

のぞ美 部屋に戻る。

佳美 …。

佳美、のぞ美の肩に抱かれて少し落ち着き、退場。

全員 …。

杏子 どういうこと？

全員 …。

杏子 一〇一の大家さんの奥さんが亡くなってる。それだけじゃなくて…大家さんの娘さんも？

全員 …。

優子 児玉さん、どうしますか？

児玉 お祓い、してもらいましょう。

暗転。

第三場

明転。その日の深夜である。

良子、ベッドで眠っている。

どこからともなく、襦袢を着た一彦が登場する。

登場する様子は、壁をすり抜けてきたようにも見える。

一彦、倒れこむ。そして、立ち上がって。

一彦　うちだ。俺は、今まで、何を。

ベッドで眠っている良子に目が行く。

一彦　良子。

一彦、良子のそばに寄る。

ひとりの男が壁をすり抜けるように登場する。ヒューン。

襦袢を着た幽霊・島貫拓郎。

拓郎　良かったな、無事に戻って来れて。

一彦　うわ！

拓郎　なんだよ！

一彦、拓郎をじーっと見る。

一彦　誰だお前。

拓郎　え？

一彦　泥棒。お前、泥棒だろ。

拓郎　は？

一彦　最近、空き巣が多いって聞く。どこから入ってきた？ど

っから入ってきたんだよ。

拓郎　何言ってるんだよ。

一彦　うちに盗るもんなんて何もねーよ。出てけ！出てけよ！

一彦、ベッドに寄る。

そして、枕をつかもうとする。ヒョイ。(つかめない)

一彦　あれ？

もう一度つかもうとする。ヒョイ。

一彦　あれ？

拓郎　ものは慣れたら掴めるようになる。慣れるまで辛抱しろ。って、生きてる人の前でやったらダメだけだな。

ヒューン。襦袢を着た幽霊・藤田あいこが登場。

あいこ　どうだった？

拓郎　なんとか無事に。

あいこ　そう。どこにいたの？

拓郎　東シナ海の上空をさまよってた。やっぱり、乗ってたへ

リコプター、海に墜落したみたい。

あいこ
へえ。

一彦
んん？んん？

あいこ
（と一彦を見て）あ！（指して）…カズヒコッチ。…フ

フフフフ！

一彦
うわ——！——！

二人
？

一彦
うわ——！——！うわ——！——！

拓郎
何だよ。

一彦
今、どこから入ってきたんだよ！

拓郎
どこって、どこも何もねーよ。

一彦
ここ二階だぞ！どうやって入ってきたんだよ！

拓郎
だから、どこも何もねーって言ってるだろ。俺らはさ、

体がないんだから、そこ、通り抜けてきたに決まってる

だろ。

一彦
はあ！？意味わかんねー！何だ、通り抜けるって！？何

訳分かんないこと言ってるんだよ！

拓郎
こいつ全然わかってねえ。

あいこ
この体になってすぐだから、仕方ないよ。

一彦
何、コソコソ話してんだよ！お前ら誰だ？誰だよ！

拓郎
じゃ、いいよ。俺たちがどういう存在か教えてあげる。

一彦
どういう存在？

拓郎
心して聞け。

一彦
おう。

拓郎
死んだんだよ。

一彦
は？

拓郎
死んだの。だからこうやって存在してるの。

一彦
どういうこと？

拓郎
俺たちは生きてる人間じゃない。でも、あの世の人間でもない。そういった、宙ぶらりんな存在。…奄美大島海域で消息を絶った船を探しに、ヘリでレスキューに向かっただろ。

一彦
ああ。

拓郎
覚えてる？

一彦
もちろん。

拓郎
そこで三日前の夕方、エンジントラブルを起こした。

一彦
エンジントラブル？

拓郎
覚えてない？

一彦
覚えてない。

拓郎
そっか。その記憶はないんだ。

一彦
ええ？

拓郎
乗ってたヘリは上空をさまよってたから、海に墜落した。墜落寸前、パラシュートで脱出を試みたけど、間に合わなかった。だから、こうなった。

一彦
…。

拓郎
お前、東シナ海上空をさまよってたから、ここに戻れるように迎えにいったんだよ。俺たち、生きてた頃では考えられないスピードで移動できるから。

あいこ
生きてた頃の時間と言って、1時間ぐらいあれば、北海道から沖縄まで行ける。

一彦
はあ？

拓郎
わかんねえよなあ。わかんねえと思うけど、ま、そうい

うことだから、色々割り切って、覚えていったほうがいいぜ。

一彦 …。

拓郎 俺、島貫拓郎。よろしく。

一彦 よろしく。

あいこ 私、藤田あいこ。よろしく。

一彦 よろしく。

ヒューン。襦袢を着た幽霊・大下沙弥加登場。

一彦 わあ！

沙弥加 …。

沙弥加、人見知り気味に一彦を見る。

拓郎 沙弥加。こいつ、生きてた頃、友達が少なかったんだって。

一彦 え？

拓郎 いじめられて、職場にも馴染めず、誰かと協力して何かを成し遂げる喜びも知らず。ま、結婚はしてたみたいだけどな。

沙弥加 ちよつと。…そんな紹介しないでよ。

ヒューン。沙弥加、退場。

一彦 わあ！！

あいこ さっちゃん！

ヒューン。あいこ、退場。

一彦 ああ！

一彦、あいこが退場した方向を見て。

一彦 壁を…

拓郎 じゃ、仲良くしようぜ。

一彦 あー！

拓郎 ？

一彦 もしも、もしもだよ？俺が本当に死んだとしたら。これ、嫁なんだけど。

拓郎 知ってる。生きてたときから見てたから。

一彦 そうなんだ。嫁はどうなるの？

拓郎 気の毒だね。

一彦 話したりは？

拓郎 出来ないに決まってんじゃん。

拓郎、退場。ヒューン。

一彦 そんな。

良子、目を覚ます。半身起き上がる。

一彦 あ。

一彦、そばによる。

一彦 良子！俺だよ！俺！わかるだろ！
良子 …。

良子、涙をこらえている。

一彦 聞こえないの？
良子 …。

良子、ベッドから身を伸ばして。

一彦 何やってんの？

良子、サイドボードから写真をとりだす。
一彦、良子の後ろに回る。

一彦 結婚式。

良子 …（パラパラめくって）。
一彦 オーストラリア。俺たち、ケアンズの協会で、式あげたんだよな。

良子、何枚かめくり、ある一枚を見て止まる。

一彦 俺ら仲良さそうに肩組んでる。

良子 …。

一彦 お前、だから、何で楽しいげな写真の時に変顔すんだよ！
お前の変顔は、本当に変なんだよ！口の形が変！あと目が半開きだつつううの！

良子 …。

一彦 本当に聞こえないの？

良子 …。

一彦 何で。何で聞こえないんだよ！！

ヒューン。沙弥加、再び登場。

一彦 …。

沙弥加 よろしく。

一彦 よろしく。…あの、幽霊ですよ？

沙弥加 そうよ。

一彦 幽霊って、たくさんいるんだね。

沙弥加 いっぱいいるよ。

一彦 へえ。

沙弥加 幽霊は、若い人が多いんだ。

一彦 どうして？

沙弥加 死んだら全員、私たちがみたいになるわけじゃない。成仏する人間もいる。でも、私たちはこうして存在してる。それは、この世界に残してきた思いがあるから。

一彦 …。

沙弥加 私たちが幽霊たる所以は、この世界に残してきた思いが

あるから。あ、鈴木さんもそうでしょ。
何で名前知ってるの？

一彦
生きてたときから見てたから。

一彦
そっか。

沙弥加
若くして死んだ人は、思いを残した人が多いから、幽霊になる確率が多いみたい。私もやっとわかってきた。

一彦
へえ。

沙弥加
民間のレスキュー、やってたんだよね？

一彦
え？

沙弥加
私、海上保安庁に勤めてたんだ。

一彦
そうなんだ。

沙弥加
旦那と結婚前、同じ職場で、一緒にあなたのように、遭難した船を捜索したりもしてたの。

一彦
じゃあ、君も海難事故か何か？

沙弥加
うううん。私は普通の交通事故だけど。

一彦
そう。

沙弥加
何か…あなたとは、仲良くなれるような。

ヒューン。あいこ、再び登場。

あいこ
さっちゃん。

沙弥加
どうしたの？

あいこ
さっちゃん、動くの早いんだな。さすがの私も追いつかないよ。

沙弥加
あいちゃんさ、最近私にベタベタくっついてくるけど、どうして？

あいこ
それはさ、私、さっちゃんのこと。…す…す…好きなんスよ。

沙弥加
…。

あいこ
好きなんス。いや、あの…いいから！抱擁とか、チューとか、そういうのいいから！

沙弥加
…。

あいこ
あの、そういう変な好きじゃなくて、友達として好きってこと！…強引に來ないで！強引に來られると、私は戸惑うばかりだから！

沙弥加
あいちゃん。ありがと。

ヒューン。沙弥加、退場。

あいこ
さっちゃん！

ヒューン。あいこ、退場。

一彦
この世に残した思い。

一彦、良子を見る。

強風の音。照明変化。

一彦、退場。ヒューン。

第四場

中盤～後半

受話器を置く。

守、芙美子、登場。

守 どうも。

芙美子 どうも。

杏子 私まだ、ドア、開けてないんですけど。

守 良子さんは？

杏子 はい？

守 奥さん！妹！

杏子 もう一人の妹と外出してますけど。

守 じゃ、いいです。伝えてもらえますか？

杏子 ？

守 僕たち、引っ越すことにしました。

杏子 え？

守 今不動産行って、今日から入れるところを決めてきました。

芙美子 た。な？

芙美子 （うなづいて）。

守 次はアパートじゃなくて、安全なマンションに住むことにしました。家賃があがって、家計には響くけど。

芙美子 （うなづく）…。

杏子 …。

守 こんなアパート、住んでられないっすよ！知ってました？人間の一番の欲求。食欲？ブー。睡眠？ブー。…安全に対する欲求です。…安全が確保されない家なんて、

家じゃないっすよ。安心して眠れやしない。それに、う

ち、そろそろ子供欲しいと思ってるんで、毎晩のように幽霊に脅かされたんじゃない、妻も落ち着いて産めない。

杏子 …。

守 鈴木さんも、考えたほうがいいですよ。まあ、現にこう

して一彦さんが、こんなことになってる訳ですけど。安全が守られない家なんてとっとと出てった方がいい。

杏子 …。

守

ま、お姉さんに、言っても仕方ないです。

守、芙美子、立ち上がる。

守

お世話になったんで、ご挨拶しようかと思ったんですけど、出てるんなら仕方がない。…行こう。

芙美子

（うなづいて）…。

杏子

インターフォン。

杏子

？

杏子、受話器を取ろうとすると、佳美、登場。

杏子

大家さん！

佳美

…。

佳美、部屋をなんとなく見て。

杏子 私、まだ、ドア…。

佳美 こうやって見てみると、感慨深いものがありますね。

杏子 え？

佳美 2013年に出来てから、鈴木さんでちょうど二十世帯の方々に住んでいただきました。

杏子 …。

守 大家さん。

佳美 あ、相良さん。気がつかなかったわ。

守 引越しの件ですけど、僕たちは今日で。

佳美 今日。早いよね。

守 今から両親がトラックで迎えに来てくれます。夜までに荷積みをして、今日中に次の家に移ります。

佳美 仕方ないと思うわ。でも、もうすぐ桜の季節だというのね。

守・芙美子 …。

佳美 せめて、この桜並木の、満開の桜を見てから行くことにしたら良かったのに。

守 そうですね。その点に関しては、名残惜しい部分はありませんけど。

佳美 …。

守 すみません。

佳美 いえ。色々ご迷惑をおかけして、ごめんなさいね。

守 こちらこそ、お世話になりました。

佳美 まだどこかでお会いできる日を。

守 大家さんもお元気で。行こう。

芙美子 …（うなづく）。

守、芙美子、退場。

佳美 …。

杏子 …。

佳美 私もね、こう見えて、信念を持って管理してきたつもりなんです。でも、こんなに早く、最後がくるとは。

杏子 最後、ですか？

佳美 不動産に、引き渡すことにしました。

杏子 …。

佳美 でも、こんな曰く付きの物件、どの不動産屋さんも買つて下さないわ。きっと、ローンの残りを返済するほどの金額は戻ってこないでしょうね。

杏子 …。

佳美 私もストレスで参ってしまいました。

杏子 …。

佳美 鈴木さんにも伝えてください。退室される際は、お気兼ねなく。

杏子 伝えておきます。

佳美、退場。

杏子 …。

ヒューン。あいこ、登場。

あいこ 母ちゃん。

ヒューン。ヒューン。ヒューン。

拓郎、沙弥加、一彦が登場。

拓郎は怒っている様子。

あいこ、突然土下座する。

あいこ すみませんでした！

拓郎 …（怒っている）。

あいこ あの、脅かすつもりはなかったの。ただ…あの、その、
なんって言うかな？ノリ？ノリでやっちゃったっていう
かさ。あの、もういいや！いっちゃえ！みたいな時、あ
るじゃん？そういう、何ていうのかな…誘惑に負けた？
そう、誘惑に負けたんだなあ。

拓郎 全然言い訳になってない！

あいこ すみません！

拓郎 座れ。

あいこ …。

拓郎 正座！

あいこ 幽霊になって正座。

あいこ、正座。

拓郎 お前も！
一彦 ええ？

拓郎 先頭切ったの、お前だろ！

一彦 すみません！

拓郎 お前も。

沙弥加 私も？

拓郎 正座！

沙弥加 何で？

一彦、沙弥加、正座。

拓郎 俺たちは、死んでるの。

あいこ …。

一彦 …。

沙弥加 …。

拓郎 見えないのな。

あいこ …。

一彦 …。

沙弥加 …。

拓郎 この人たちからしたら、過去の存在なんだよ。いない人
ち。

あいこ …。

一彦 …。

沙弥加 …。

拓郎 そんな人たちにいきなり話しかけられたら、どう思う？
気持ち悪いだろ？…生きてた頃を思い出してみろよ。死
んだおじいちゃんが話しかけてきたら、ビックリしただ
ろ。

あいこ
…。

一彦
…。

沙弥加
…。

拓郎
それに、生きてる人たちの人生を変えてしまう恐れもある。現に、こうやって変わってきてる人もいる。それは

さ、責任取れないじゃん。申し訳ないじゃん。

あいこ
…。

一彦
…。

沙弥加
…。

拓郎
俺たちは、こっちの世界に干渉しちゃいけないの。見て

るだけ。静かに見て、待って、自分の体が消えていくのを待つ。それが俺たち。わかった？

あいこ
わかんないよ。

拓郎
？

あいこ
そんなのわかんないよ。私は母ちゃんと話したいし、謝

りたいし、何か力になれることがあるんだったら、やりたい。

拓郎
…。

あいこ
（立ち上がって）幽霊なら幽霊なりに出来ることがある

はずじゃん。こんなに早く動けるんだし、壁とか窓とか

すり抜ける事が出来るんだから。それなのに、見てるだけ

なんて、悲しいよ。

拓郎
でも、それが俺達なの。

あいこ
例えばさ、時間を決めて、その時間だけ話すのって良くない？朝と夜だけ決めて、おはようとか、おやすみの挨拶程度でいいから、その時間だけオッケーにすると

か？

拓郎
それ、絶対気持ち悪いだろ。

あいこ
そんなのわかんないじゃん。もしかしたら、母ちゃんも

それを望んでるかもしれない。

拓郎
そんな訳ないじゃん。

あいこ
そうかな。

拓郎
とにかく！話しかけるのは禁止！

あいこ
そんな。

拓郎
座れ。

あいこ
…（と座って）…拓郎さんも（拓郎の踊りの真似して）

まんざらでもない感じだったよね。

沙弥加
ノリノリだった。

あいこ
ねえ。

沙弥加
うん。

拓郎
お前らに合わせただけよ！？

沙弥加
そうかな？

あいこ
実は拓郎さんも誰かに話しかけたいと思ってて、まあい

つか、何とかなるか、ぐらいの軽い気持ちで、つまり誘惑に負けたんじゃないの？

うるさいうるさいうるさい！とにかく！話しかけるのは禁止！

拓郎
…。

あいこ
…。

沙弥加
…。

拓郎
静かに待つ。

あいこ
静かに。一番嫌いな響き！

拓郎
…。

あいこ はーあ。

玄関から良子が登場。

良子 …。

杏子 ？

一彦 良子！（と立つ）

拓郎 おい！…今言ったところだろ。

一彦 …そう…ですよね（座る）。

良子、何かを探するような動き。

良子 カズ？そこにいるの？

一彦 え？

拓郎 え？

良子 杏子お姉ちゃん。カズはどこにいるの？

玄関から優子が乙花を連れてくる。

乙花 痛い痛い痛い痛い。

優子 …。

乙花 痛いよ！乱暴にしなさんな！

優子 良子、たっぷり話しな。

良子 …。

杏子 え？

乙花、優子・良子と対峙する。

乙花 ちょっと、落ち着きなさい。

良子・優子 …。

乙花 落ち着きなさいってば。

優子 良子が話したいって言うてるんです。もう一回、カズく

んを呼んでくれませんか？

乙花 なぜ？

優子 なぜとか、そういうことじゃない。話したいって言うて

るんです！早くカズくん、出さないよ！

乙花 うわああ。

優子、乙花を追いつけ回す。

乙花 ちょっと、落ち着きなさいな。落ち着いて。

優子 …。

乙花 呼べといわれても、一彦さんの方から出てきてくれない

と、話は出来ませんよ。

優子 さっき降ろしたじゃないですか。さっきと同じことをや

ってくればいいんです。

乙花 あれはね、降ろしたんじゃないくてね、来たんですよ。向

こうから。

優子 はあ？

乙花 だから、こっちが呼ぼうとしても、無理なんです！

優子 早く降ろしなさいよ！

優子、さらに追いかける。

優子 お金なら払います！いくらでも！

乙花 いや、そういう問題じゃないですよね。

優子 金額を言ってもらえれば、用意しますから！

乙花 ちょっと、落ち着いてください。

良子 幽霊でも何でもいいんです。

乙花 え？

良子 今、何やってるのか、死んだ世界で何やってるのか、話

拓郎 ができるばいいんです。

拓郎 我慢だぞ。

一彦 ……うん。

拓郎 我慢。

一彦 ……

良子 お願いします。カズの霊を降ろしてください。

乙花 いや、そう言われても。

優子 早く！

乙花 うわああ！

優子、乙花を追いかける。

杏子 二人とも。

良子 カズ——！いるなら返事して……死んでもいい。話

一彦 がしたい。

良子 ……

良子 そこにいるんでしょう？返事して。…カズ——！カズ

—————！

杏子 二人とも！

良子・優子 ……

杏子 何、言ってるのよ。カズくんの霊なんているけな

い。こうやって人の弱みに付け込んで、商売する人た

ちがいるの。何でわかんないの！

優子 じゃあ、さっき起こったことは何！？

杏子 インチキに決まってんじゃない。

良子 ……

杏子 明日、1時にカズくんの会社にご挨拶に行くから、予定

空けといて。待ち合わせ場所、後でラインで送る。

良子・優子 ……

退場しようとする。

インターフォン。

杏子 誰。

優子 誰。

拓郎 誰？

あいこ ……

ヒューン。あいこ、退場。

優子が出る。

優子 はい。

智仁の声 大下です。

優子 大下さん？

智仁の声 はい。あの、一〇一の。

優子 一〇一？

優子、良子と杏子を見る。

優子 …。

優子、玄関へ。

杏子 一〇一の大下さんって、奥さんが亡くなった？

良子 …（うなづく）。

杏子 どうしたの？

ヒューン。あいこ、戻ってくる。

あいこ （慌てて）さっちゃん。

沙弥加 何？

あいこ （指で鬼を示唆する動作）…。

沙弥加 …。

玄関から大下智仁、登場。優子も戻ってくる。

智仁、何かを感じようとしている様子。

杏子 どうしたんですか？

智仁、立ち止まって。

智仁 そこにいるだろ。

あいこ わあ。

拓郎 おおっと。

沙弥加 …。

一彦 誰？

あいこ （やばい人と合図）…。

一彦 え？

智仁 また、悪さしたんだって？

拓郎・あいこ・沙弥加 （顔を見合わせて）…。

智仁 迷惑かけるなって、あれほど言ったのに。

杏子 え？

智仁 カーテン、開けてもらえますか？

優子 え？

智仁 カーテン。

優子 はい。（と開けに行く）

智仁 お塩を持って来てください。

良子 え？

智仁 塩です、塩。

良子 はい。（取りに行く）

智仁 あと、お皿を人数分。小さいのでいいです。

良子 …。

杏子 ？

杏子も手伝う。二人で持ってくる。

あいこ これ、逃げたほうが、よくない？

拓郎 そうだな。逃げよう。

一彦 え？

沙弥加 …。

智仁 塩を全員分、分けて、皆さん、手に持ってください。

分ける。

拓郎 何やってんの。

沙弥加 …。

拓郎 逃げよって。

沙弥加 …。

智仁 持ちましたか？じゃあ、全員で、部屋の四隅を周りましょう。

全員 …。

智仁 周って！

全員 …。

全員、周りだす。

拓郎 うわ！

あいこ ひゃ！（うづくまって）

沙弥加 ！

智仁 止まらないで、どんどん回って。

全員 …。

あいこ やばい！私これ、大嫌い！

智仁、カメラを取り出し。

智仁 …。

カシヤ。カシヤ。カシヤ。カシヤ。カシヤ。カシヤ。

拓郎 うわ！

一彦 うわ！

あいこ わあ！

沙弥加 ！！

周っている4人、周るのをやめる。

杏子 何をされてるんですか？

智仁 幽霊ってのは、波動が低レベルなんです。だからフラッシュを連続で焚くと、部屋中の波動レベルが高まって、

低波動な存在はいらなくなる。

杏子 え？

あいこ もうダメ。

ヒューン。あいこ、退場。

沙弥加、反抗的に、智仁に寄る。

拓郎 逃げよ。

沙弥加 …。

拓郎 何やってんだよ！逃げんだよ！

沙弥加 智くん！

智仁 …。

乙花 …。

沙弥加 智くんってば！

全員 ？

沙弥加 何でこんなことすんの。確かに、お騒がせして申し訳な

いと思うけど、幽霊って悪い人たちじゃないんだよ。みんないい人たち。それに、なるべく迷惑かけないようにするからさ。

智仁 今、迷惑かけないつつた？迷惑かけただろ！

沙弥加 それは謝る。謝るよ。だけどさ、本当に悪い人たちじゃないの。だから、私たちを嫌わないで欲しいな。

智仁 嫌われて当然だろ。

沙弥加 …。

智仁 いい人とか悪い人とか、そういうことじゃないんだよ！

幽霊は幽霊なんだよ！こっちに出てこられたら、気持ち悪いんだよ。

沙弥加 …。

智仁 お願いだから、成仏してくれよ。

全員 …。

沙弥加 したいよ。私だって成仏したいけど、やり方がわからな

智仁 …。

沙弥加 智くんとはちゃんとお別れした。だから智くんにはもう

未練はない。でも、私は幽霊として存在してる。どうしてか。自分でもわからないんだよ。

ヒューン。沙弥加、退場。

拓郎 行こう。

一彦 …。

ヒューン。ヒューン。拓郎、一彦、退場。

智仁

いなくなつたみたいです。また出てくるかもしれないけど、当分大丈夫でしょう。また出てきたら、今みたいにやると、いなくなりますから。

杏子

ありがとうございます。

智仁

幽霊の嫌いなものは、色んな説があるんで、数珠とか念仏とか、色々試してみたいと思いますよ。

杏子

そう、なんですね。

全員、言葉なく、智仁を見る。

杏子

こういったことは、よく、されてるんですか？

智仁

まあ。

杏子

…。

智仁

あいつが死んだころ、よく出てきたもんで。

全員

…。

沙弥加はね。友達が少ないタイプの人間だったんです。

小中高といじめられっ子で、会社に入ってもなかなか馴染めずにいた。そのせいか、極端な寂しがり屋だったんです。

…。

極端な寂しがり屋で、極端なわがまま。

…。

僕ね、思うんですけど、寂しがりやがままって相関関係があると思うんです。寂しいから誰かに受け止めてもらいたくなる。誰かに自分の思いを押し付ける。わかって、みたいな感じで。あいつの場合、受け止めてくれる人が他にいなかったから、全部僕にきてたんですね。でも、なんていうか、それを全部受け止めてあげたいって言うか、ずっとそう思ってた。そういう未練は確かにあります。

…。

でも、死んでるんだから。幽霊に心があるとしても、僕たちと関わる権利はないんだから。

突然、玄関から桃子が登場。部屋を覗くように。

桃子
智くん。

智仁
桃子。

桃子、入ってくる。

智仁
ごめん。ひとりにさせて。

桃子
お姉ちゃんがいたの、ここ？
智仁
うん。
桃子
そう。

桃子、何かを探している様子。

智仁
すみません。突然お邪魔して。

杏子
こちらは？

智仁
沙弥加の妹の桃子です。

杏子
え？

智仁
沙弥加のお母さんの了承を得て、うちに住んでるんです。ご両親も手をつけられないみたいで。

全員
？

桃子
お姉ちゃん？お姉ちゃん？

全員
？

桃子
いた。

座る。

桃子
お姉ちゃん、明日の持ち物は全部入れた？…ダメだよ！
寝る前にランドセルに入れないと！…宿題は？…ダメ。
寝る前にやらないと！また青木先生に怒られるよ。…今日の宿題、何？…じゃあ、計算ドリル、出して。開いて。幽霊の沙弥加と話してるうちに。

智仁
…。
全員
違うでしょ！サンシ・十二。桃子がやってあげる。貸し

て？掛け算は桃子の方が得意だから。鉛筆。鉛筆貸して。

突然様子が変わり。

桃子
お姉ちゃん。いない。お姉ちゃん。いない。…お姉ちゃん…お姉ちゃん——ん！お姉ちゃん——ん！

智仁、桃子をなだめようとする。

桃子
智くん！お姉ちゃんがないよ！

智仁

桃子
お姉ちゃん、どこ行ったの！お姉ちゃん、どこ行ったの！

智仁
大丈夫。大丈夫だから。

桃子
智くん。

智仁、桃子をなだめて、座らせる。

智仁
桃子は、幽霊の被害者です。桃子のような人間は、もう

出て欲しくない。

全員

…。

智仁
鈴木さん。

良子
はい。

智仁
大家さんから聞きました。この度はお気の毒様です。

良子

智仁
辛いとは思いますが。…明日を見据えて！

全員

智仁
桃子。桃子。

桃子
（急に元に戻って）智くん。

智仁、桃子の手をとって行こうとする。

智仁
ああ、そうそう。

良子
？

智仁
僕、海上保安庁に勤めてるんです。今は休職中ですけど。

良子
…だから僕も海難救助に従事してたことがあります。

智仁

良子
何か、共通点が。

智仁

智仁、桃子を連れて退場。

良子
…。

良子、奥の扉へ退場。

優子
良子！

優子と杏子、顔見合わせる。

照明変化。

ヒューン。ヒューン。ヒューン。ヒューン。

あいこ、拓郎、沙弥加、一彦、登場。正座する。

前明かりの中で芝居が始まり、杏子、優子、乙花は退場。